

空穂の出発点と古典研究

山路 平四郎

(一)

空穂は若い日に郷土を出て東京で生涯を送ったのであるが、
「漂泊の信濃、ひとわれ東京のこの地に生きて世を終へむとす」
(昭和三九年歳末)とみずから歌っているように、空穂にとつては、東京の生活はいつになっても旅であり、心の憩いはいつになっても故郷であった。空穂の遺骨は遺言によって分骨されて、故郷の祖先の墓の傍らに納められた。帰るべき処に帰ったのである。

このことは、空穂が地主階級に属した百姓の出身であることと深い関係を持っている。旧土族の心の拠りどころは藩公であった。版籍奉還後に藩公が中央に移り住めば、土族にとつての其の土地は、むしろ抜け殻に等しい。しかも扶持に離れた土族からすれば、その土地の多くは没落の苦い思い出とながっている。ところが、空穂の場合はこれと全く反対であった。土地は祖先伝来のものである。長い間、血縁のものが風雪に堪えて、守り抜いて来た土地である。しかも地主階級に属する百姓は、四民平等の維

新後では、一つの新興勢力であった。思い出は暗くもなかったし、それに相応しい底力も備えていた。空穂が失意の時には、故郷はいつも温い手を差伸べた。これに愛着のあるのは当然であろう。空穂のふる里を恋うる感情は老来いよいよ強く、あたかも幼児のように、「故里に憑かれしわれと人嗤へ郷土は恋し亡き親のごと」(昭和四一年夏)とも詠じている。こうした空穂であつてみれば、空穂の何について論じるにしても、到底郷土から切り離して考えることは出来ない。

× × × × ×

空穂の生れた和田村は、松本市の中心から僅か四キロほど離れた処だが、旧幕時代は松本藩に属せず、幕府直轄の天領であった。古くは高遠領の時代もあったという。もっとも、信濃ノ国には大藩は無く、松代を筆頭に幾多の小藩に分割され、その小藩の要所に天領が配置されてあつた。これは強大な勢力が、守るに易く攻めるに難い天険に拠つて、反乱を企てることを警戒した幕府が、ひたすら分散の政策をとつて、互いに牽制させた結果で、和田村もそうした意味で仁科(大町)街道を抑える天領の一つであ

った。天領の農民が幕府を背景として、藩治下の農民よりも比較的恵まれた有利な立場にあったことは、たとえば、窪田聖谷に關して空穂が記している、文政年間の和田堰訴状事件における幕府の裁断（全集第十二巻、我が家の出自を語る。）一つに徴しても、そのおおよそは察しられよう。こうした格差があり、利害關係の錯綜した、いわば、小国家の群立ともいふべき状態が長く続いた環境の下での住民の間からは、大局的な見地からする順応、調和といった隠やかな気分は生れようもなかった。逆に、それなりにはいさぎよい抵抗、独立といった厳しい精神が培われたのである。信濃の近代文化発祥の拠点であった松本、伊那、佐久、善光寺の四つの平には、それぞれ氣質の上に小異がみられるが、そこに一貫して流れるものは、この抵抗、独立の精神で、殊に松本平の人々にはその氣質が著しい。明治八―九年の地租改正に際しては、戸長（村長）連中の首唱によって、「筑摩県（長野県）民会」が結成されて、民権運動史上に遡るすこぶる果敢な抵抗が企てられた。更らに明治十三年二月には、松本に上條蠲司、松沢求策を中心として、民権の伸長を期し、国会の開設を願って、「癸匡社」が設立され、精力的な活動がつづけられたのである。このようにわが民権運動の黎明期に、松本平がその舞台の一つを提供したことは、もとより幾多の理由が挙げられようが、何よりも根本に、この抵抗、独立の精神が、その地の有識者の間に伝統となっていたことを知らねばならない。しかも闘争は人々を理窟ばくする。空穂はこうした松本平に生を享け、有識の家に人となったのである。

まことに、空穂みずからが詠じたように、「偉いなるは風土のちから顔みれば初見の人の生地は知らる」（老楓の下）である。何びとと雖も風土の影響を受けぬ者はない。かつて、空穂の同郷の友であり、心を許した同僚であった吉江喬松は、『空穂歌集』（明治四五）の序文（全集第一巻六三頁）で、松本平の自然環境が空穂に及ぼした影響についてのべた。相識の同郷人らしい微細にふれた見事な指摘ではあったが、いかにも後ちに、山岳文学を説き海洋文学を説いた自然愛好者の喬松を思わせる觀察で、空穂の和田村を喬松の塩尻村に置き換れば、直ちに喬松自身への風土的影響としても通じるもので、少くとも喬松ごのみに固定化され、美化されていた。併しながら、空穂に働きかけた風土の場合は、そうした自然環境と共に、むしろそれより多く、もっと人間臭い、たとえば、述べた抵抗、独立といった人文環境が指摘さるべきだった。空穂の故郷への視点は、常に山河よりも其処の生活であり、興味は人間の上に向けられていた。この態度は空穂の文学作品に対する評価の上にも示されている。最も晩年の著作『芭蕉の俳句』（全集第二六巻）の「あとがき」（昭和三十八年十一月記）の中で、空穂はこう云っている。「従来筆者は作者よりも作品に重点をおき、一に作品に取りすがって鑑賞しようとしていたのである。老齡にはいると、それとは反対となり、作品よりも作者に重点を置くやうになった来た」と。この人間重視は空穂の帰結でもあり、また本然を示すものでもあった。

早く郷土を離れた空穂は、遠くから郷土の生活を眺めることによって、郷土の人々の長所と短所とがはっきり分っていた。自分

は勉めてその短所を避けようとした。空穂は我が道を歩んだが、談理を好まず、論争にも立ち入らなかった。このことは九十年を生きた空穂の足跡が明らかに示している。

空穂は晩年に他からの懇望に応じて、屢ば我が生い立ちと年少時代の思い出とを語った。空穂は百姓育ちを自認していた。すでに生命の限界を達観して、後から来る者のために、自分等の世代のものだけが知っている遠い明治の、勤労に明け暮れた農村の有様と、そうすることを使命と観じた、当時の農民魂とを語って、現代の風潮に対しての実物示教と問題提起とをこころみたものであろう。八十の坂を遙かに越しても、なお徒食する生活に辛抱のなり兼ねた空穂である。その生涯の硯田筆耕に際して、常に勤労を厭わぬ農民魂が、我が心の奥に息づく時、改めて血管に伝流する血の濃さを思つて、父を憶い、母を憶い、転た感慨に堪えぬものがあつたに違いない。けれどもその生い立ちを語る文章には、聊かの感傷も誇張も交っていない。ただ見聞の事実だけを淡々と書き記している。その客観に徹した態度は、遂に老耄とは無縁だった空穂の聡明を思わせるもので、記録としての確かさを持つており、その人文環境を探り、空穂の出発点を理解する何よりも恰好の資料となっている。それから又、空穂が詩歌から遠ざかった三十代の前半、自然主義文学の影響下で精力的に書きつづけた小説群は、その題材の多くを故郷の人の上に求めている、ここにも亦、若い日の直接見聞が土台となつて、青年空穂の周辺の情況が浮き彫りにされている。したがつてこれらの諸篇を読めば、空穂の青少年時代の人間形成、それはおそらく三つ子の魂百まで

で、生涯を貫くものとなつたろうが、それと松本平の人文環境との両者が、どれほど密接な相關々係にあつたかを、じゅうぶんに窺うことが出来るのである。どんな角度から描く空穂像でも、基本として無視出来ないこの点について、のべた諸篇をもとに、少しばかり触れてみよう。

空穂が小学校の高等科時代を過した松本の開智学校の校舎は、現在も昔の儘の姿で、保存されてあるという。幼い空穂の目を驚かした立派な建物で、当時の大学南校の校舎をそっくり模した様式の建物である。小学尋常科（四年）は各村ごとに統合されていたが、東筑摩郡の高等科（四年）は松本と塩尻とに統合されていて、その松本のものが開智学校であつた。この開智学校の古い卒業生の一人である沢柳政太郎は、空穂の青年時代には、すでに中央の教育界を舞台に、あるいは文部官僚として花やかな活躍をつづけていた。信州が教育王国といわれるようになった原因の一つには、沢柳の存在がこの地方の有為な青年を刺激して、多く教育界に向わせた点が挙げられるであらう。空穂は親しい旧知を紹介するように、松本を訪れる人々に、この建物の一見をすすめていた。ところで、大学南校は明治新政府が官吏養成のために、各藩の秀才を簡拔して入学させた、今日の東京大学の前身に当るものだが、云わば、こうした權威ともみられる建物の様式をそっくりその儘、開智学校の校舎に採用したのは、やがて当時の松本平の人心のありようを、端的に物語るものであらう、少くとも私にはそう思えてならない。もとよりそうした企画の立案は少数の關係

者の間のものだったろうが、相当思い切ったこの企画が、無理なく実現した背後には、多数の了解があったとしなければなるまい。すなわち多数は權威をなぞった校舎の建設を受け入れたのだが、併し、理窟はいこの地方の人心を考えると、甲論乙駁、その受け入れ方が一様であったとは到底思えない。しばらく想像の筆を進めてみる。空穂は「中村屋」の相馬愛蔵と「火の柱」の木下尚江とについて、松本平に對立するきわやかな二つのタイプを認めているが（全集第十二巻、六〇頁）、実務家肌の或る者は權威を認めて、その校舎を權威を目差す努力目標の象徴と見て賛成しただろうし、理想家肌の或る者は權威を他に認めず、同じ校舎を權威は我れであることの象徴として受け止めたであらう。前者の態度は、厳しい信濃の自然に立ち向った農民の智慧の中から生れたものであり、後者の態度は、信濃の歴史が内蔵する有識者の自覚に発したもので、いずれも必然の二傾向であったが、——もちろん當時は前者は健全な良識派、後者は夜郎自大の壯語者とみられていたろうが——この二つの型の者が絡みあいながらも、それぞれの解釈で、開智学校の校舎を大学南校の様式とする破天荒なこの企画を受け入れて、奇妙な同行者となったものであらう。とは云え、相對立する傾向の、この奇妙な同行者の間で、誰れがみても明らかに一致していると認められる点の一つは、常に新を求めてやまぬ積極精神と行動性、一つは、ここ松本平が県下の学問・文芸の最高中心の地であるとする自信と強烈な自己主張との二点であらう。以上が昔の大学南校の校舎をしのぶよすがの意味で、今は重要文化財的な存在となったこの建造物から、私が読みとつ

た、当時の松本平の均らしてみた人心の帰趨であつて、空穂少年はこうした空氣を呼吸しながら四キロの道を開智学校に通いつづけたのである。

明治二十三年、国会開設の年である。この学校の三年から、空穂が松本尋常中学校（現深志高校）に入學した當時は、松本中学校は県下唯一の県立中学であつた。明治十九年、長野県は県費の節約を目的に、それまで長野、上田、飯田にあつた中学校を廢止して松本に統合し、また明治十六年以来、長野から松本に移されていた師範学校を、再び長野に返して、ここに県下の最高学府は、県立の松本中学と長野師範学校との二校となつた。（松本市史）したがって、県下の各地から、従来ならば長野、上田、飯田の各中学校に入學すべき範圍の者まで、松本の中学校に集まつて来た。たとえば、早稲田大学の第三代總長田中穂積は、北信の松代まつしろ在の出であつたが、空穂の印象によれば、何年かの上級生で、きわだつて瀟灑な服装をした少年だつたと云う。このような、遠方から遊學した来た少年の多くは、おおかた四民平等の恩恵に浴して、国政の裏方から表面に台頭して来た地主層に属する地方有力者の子弟であつた。師範学校、神学校、士官学校とシの字のつく三つの学校は、金が無くても教育してくれりと、或る明治人が云つた。このことは日本の近代史を考える上では重要な意味を持つが、そういう師範学校とは違つて、中学の方は或る程度の金がかかる。寄宿先を求めて、中学校で修業させることは、單なる教育熱心では出来かねることで、相當な費用とその投資に見合う才能とを必要としたであらう。空穂生徒の周圍には、地元の

貧乏士族の子弟もいたろうが、こうした選ばれた立場の少年も少なかった。空穂が松本中学に入學した当時は推薦入學の制度があつて、生徒は全県下から優秀者が推薦された。定員の五分の四はこの制度による入學者であり、第一期の考查の結果、その推薦による無試験入學者の半数までが落第したと云う。この事實は、この學校の教育がどんなに厳しいものであつたかを示している。すなわち、周囲には選ばれた立場の少年が居た、しかもその教育は嚴格を極めた、とすればそれに堪え抜いた中学生徒の間に、我れこそは全県下の精鋭であるというエリート意識が芽ばえたことは、容易に察しられる。空穂は當時を回想して、「中学生となつた私が最初に痛感させられたことは、中学生の孤独ということであつた。なぜそんな気がするのかその當時はわからなかつた。後年學校を離れてそのことを追憶した時、あれは學課の程度が面倒過ぎて、みんなが劣等感を持たされるので、それに対する一種の反抗気分ではなかつたかと思つた。」（全集第六卷、七十年前の中学生）と述べている。これは謙虚にすぎる自省であらう。すなわち、孤独感の依つて来るものとしては、一般的に云えば、自我の目覺めということもあらう。當時の特殊性としては、新興の地主階級の子弟と没落士族の子弟との間の融和し難い競争的な零團氣ということもあらう。しかし何よりもその孤独感には、空穂の自認したように、「一種の反抗気分」に基づくことは確かとしても、その反抗気分は「劣等感」からのものではなくむしろ人前を進め阻まれがちなエリートの苦惱から生じたものと解すべきではなからうか。このエリートなるがゆえに持つ孤独は、八新詩社

中の空穂Vをはじめとして、その生涯にまつわる一つの影であつた。窪田章一郎著の『窪田空穂』の「年譜」によれば、「中学五年間は亂說時代で、雜誌類は文學界、女學雜誌、少年園などに親しむ。透谷、藤村の詩、蕪村論議により蕪村の俳句なども読み、詩に心を引かれる。短歌には関心なし。松本新町の教会に牧師より英語を学ぶ」とあるのは、この孤独な少年がひたすら文學に親しんだことを示している。

中學時代のあとの四年間を空穂は父の縁で學校に隣接した深志城内の「農事協會」の事務所で過ごすこととなつた。「農事協會」というのは農事の改良を目的とした事業団体で津田仙などの首唱によつて創設されたものだが、當時振わなくなつていたので空穂の父で勸農委員であつた窪田庄治郎が郡長の懇望でその立て直しと管理に當つたもので、万事に熱心な庄治郎は生活を其処に移したのである。空穂は両親が年をとつてからの末子で、その鐘愛を受けたが、庄治郎はすでに家督を長子に譲つて、空穂に対する恩感にも、長子への遠慮があつたろうが、この「農事協會」では親子水入らずで起居を共にすることになった。空穂はこの父を心から尊敬していた。多感な中学生時代のこの生活は、親と子との直接的な触れ合いを通じて、空穂の将来に大きな感化を与えた。「農事協會」には庄治郎によつて新しい経営方法が採られていた。庄治郎を廻つて新しい教育を受けた人々も尋ねて來た。空穂自身も事務的な仕事の手伝いをさせられた。おのづから空穂少年の見聞の範圍は閉鎖された農村和田村の生活より一段と広いものとなつた。すなわち空穂の自認した百姓育ちは、ここでは絶えず新風

の吹き込んで来る百姓育ちであったのである。一徹に似てしかも適応性に富んだ空穂の性格の根底は早くもここに据えられたと云っている。その庄治郎の人間像は、空穂自身が「我が家の出自を語る」(全集第十二巻)で余すところなく描いている。「子は親に似る」という。いまその中から空穂を論じるのに必要な二、三の点を摘記しよう。

庄治郎は傾いた窪田家の家産を立て直した。独力で、思い切った手段で、予期したとおりの日時で、それを成し遂げた。果断で、周密で、強い意志を思わせるもので、この特質はその儘空穂に伝わっている。庄治郎は少年時代には香川景樹門の内山真弓の私塾で漢籍を習い、甚だその学問的才能を囑望されたが、傾きかけた家運の中で早く父を亡く、一家を双肩に擔って農事に専念したのである。少年時代のこの修身、齊家の儒教的教育は庄治郎の心の奥の最も深いところに、しっかりと根を下した。壮年時代には、いちおうフランス流の権利論の洗礼を受け、明治十三年「葵匡社」創立時には会員となって、会費も納入している。(有賀・千原両氏編、葵匡社資料集)併しながら、青年時代に実社会の苦勞をなめ尽した庄治郎には、当時のやや空想的で、やや煽動的な政治運動に深入りの出来る筈がない。むしろそうしたことで父祖伝来の家産を蕩尽する人々を白眼視して、謂う所の実学に甘心して、農事の他に、当時の新事業であった製糸、製糖の事業にも関係した。吏党・民党抗争の政治圏外にあり、しかもその姿勢は常に前向きであった。座右には佐藤信淵の農書、二宮尊徳の書、新しいところで福翁百話などが置かれてあったというから、最後に

は農事に徹し、思想的には經世実用の福沢流の功利主義に傾いたものであろう。云うならばこれは封建社会から脱皮して近代に向って歩みを始め、急進、保守の二勢力がこもこも隆替したその当時の日本の、指導的立場にあった人々の思想遍歴の、もっとも堅実型の一つであったが、これが松本平の一農民の上にそっくりその儘現れているのは、庄治郎が決して単なる一地方の篤農、精農で終っていないことを物語るものである。庄治郎はよく読み、よく書いた人だというのが、同時に新時代への遷りを敏感に感じ取る皮膚感覚の持ち主だったに違いない。この資性もまた、そっくり空穂に伝えられている。現在の窪田家の宗教的行事は神道であるが、これは旦那寺の若い住職の放縱に憤激した庄治郎が寺から離れて神道に代ったからだと言う。もっとも惣本家の窪田松門(嬰谷の子)は政治生活を隠退してから出羽三山の三山神社、信濃小県郡の生島足島神社(いけしまのじんじ)の官司を務めた。これは松門が第二回国会へ代議士に出た際、吏党で品川弥次郎の援助を受けたというからおそらく寺社人事を司っていた内務省筋からの推挙であろうが松門がこうした方面に向けられたのは、或は窪田家と神道とは前々から何らかのつながりがあったとも想像されなくもないが、それは兎に角として、庄治郎が村の寺から絶縁したことは、何といっても長い習俗からの訣別で、当時としては頗る勇氣のいる、果断の行為であったと思う。しかも帰結するところが、日本古来の神道であったのは、庄治郎の生涯の総決算の象徴ともみられる行為であった。

庄治郎とキリスト教との関係を察すべきものは何もない。ただ

「……わが家に持たる聖書の古きをば取り出で読める 大型のその聖書はも 亡き父の読ましけるもの」(鏡葉)と空穂が詠っているだけで、その聖書も他から寄贈を受けたものらしい。併し当時多少とも新時代の空気を呼吸したもので、基督教に関心を示さなかったものは極わめて少ない。民権論者とキリスト教徒とは或る時期には手をつないで保守勢力に対抗した。松本平についていえば、木下尚江も普選運動の中村太八郎も共にキリスト信者であった。また「農事協会」の設立提唱者で、庄治郎の上京の折りには款待したという津田仙は、中村正直、新島襄とならぶ、当時のキリスト教界の大先達であった。木曾路に掘り出されたというマリヤ地蔵の昔は暫く置く、松本では既に明治九年メソヂストの美以教会が布教活動を始めている。(松本市史)おそらく当時の輸出興国による桑茶政策の結果、養蚕の盛んなこの地方は生繭市場のあつた横浜と交流があり、時代の新しい空気は早く横浜を通して流れ込んだものであろう。こうしたことを考えると、時代の遷りに敏感であつた庄治郎が、ある時期には、キリスト教に無関心心だつたとは到底思えない。けれども結局、庄治郎は日本古来の神道に立ち帰つたのである。この復帰は農民生活の伝統の重さを感じさせるものである。土に生きる農民のなりひは、天照らす日の神をはじめ、水を知る神、その他諸々の神々の恵みによるものである。これは百姓生活からの実感であつたろう。のみならず、窪田畠谷は篤胤門下であつたというが、明治初年の神道は、人道即神道とする平田流が全盛で、この点も至誠、守操の庄治郎の人々と触れあうものがあつたに違いない。云うならば、庄治郎の神

道への復帰は、生れおちて以来、身につけていた農民魂への復帰であつた。進歩の中の保守、この点もまた空穂の生涯を考える上で大きな意味をもっていた。

以上、やや空穂の周辺を語りすぎたようだが、ひたすら親を慕い、故郷を思つた空穂であつてみれば、これらのことは如何なる角度から空穂を論じる場合でも知らねばならぬ予備知識であらう。

(二)

空穂の古典研究を時期の上から分けると、大正八年、早稲田大学の文学部に国文学専攻科が創設され、空穂は恩師の坪内逍遙の推輓で講師に就任し、同九年四月から和歌文学の講座を担当したが、ここに一線を引いて、それ以前を前期、それ以後を後期とするのが適當であらう。何となれば、空穂は現実の一コマ一コマを大切に、決して其の場凌ぎの仕事の出来る人ではなかつた。農村に生れて、ごまかしのきかない誠実な勤労だけが、直ちに收穫に繋がる事実を、尊敬する父の庄治郎から実物示教されていた。空穂はいくつになつても、文学に志した我が身の前途を案じて死んだ父の眼を恐れたのである。その父に対しても、いい加減のことは出来ない、何事にも全力を尽そう、これは空穂の第二天性となつてた。しかもこの場合は恩師の負託をうけて、母校に新設された国文学専攻科の学生のために古典の講義をするのである。官学には国文学研究の伝統があつたが、私学にはなかつた。いま、それに対抗して新しい道を切り開いていこうと云うの

である。それが生やさしい道でないことは、空穂にはわかりすぎるほど分っていた。当然のことながら、従来と異なる厳しい態度で、古典に立ち向ったに違いない。空穂の古典研究を、大正九年を堺に、前・後期に分ける所以はここにあった。更らに、後期の中を分けると、母校の教授として研究生活も漸く進んだ昭和七年に『新古今和歌集評釈』の上巻が出版された。この評釈は、当時未だ必ずしも普及されていたとはいえない新古今集について、その歌風の真髓を、歌の歴史の中で適確に捉えて、しかもこれを極わめて分かり易い言葉で広く知らせた画期的な業績だった。この評釈には語釈・釈・評のほか、「評又」という部があって、従来の目ぼしい注釈書の説が詳しく検討してある。これは今までの空穂の評釈書には見られぬ新しい試みで、学究としての自己の立場を明らかにしたものである。この仕組みは、つづく『古今和歌集評釈』（昭和一〇・一二）、『万葉集評釈』（昭和一八・二七）にも踏襲されて空穂評釈の一つの型となった。万葉・古今・新古今のその一つだけでも註釈するのは容易でない。空穂は幾度か改訂を行ない、一人でこの三大歌集全歌の評釈を完成した。これは今までの何びとも成し得なかった偉業である。この評釈三部作は、空穂の歌人的感覚と学問的蓄積とが渾然一致したユニークな研究で、学界からも高く評価された空穂の代表作である。そうした学究としての円熟期を示す第一作が世に出たという意味で、この昭和七年にも一つの道標を樹てるべきであろう。

このように分けて、前期の仕事のうちで、重なる労作をあげると、誰しも明治四十五年刊行の『評釈伊勢物語』（全集第二五巻）、

大正四年刊行の『奈良朝及平安朝文学講話』（全集第九巻）、大正四十六年刊行の『万葉集選』（全集第二五巻）に指を屈するだろう。空穂自身も晩年の昭和三十年に執筆した「わが文学体験」（全集第六巻）の中で、その頃の思い出の著書として、古典関係はこの三部と、他に『源氏物語』これは大正三年の世界名著物語の一編、源氏物語の梗概を紹介したもの、空穂のすぐれた文学業績の一つ「現代語釈源氏物語」（全集第二七・八巻、昭和二二・二四）の出発点である。Ⅱとを挙げて、出版に至るまでの事情をやや詳しく述べている。この四著を空穂山脈の対古典前期の連峯と見立てて、しばらくその裾野の有様に目を転じる。以下説くところはおのずから古典に関する方向からの展望に限られる。

空穂は憧れの東京専門学校（後の早稲田大学）の文学科に学ぶこと僅か一年で、みずからの才能に幻滅して退学した。その当時の早稲田には晩学の者が多かった。同級生であった深沢由次郎などは入学以前、すでに九段で芸者相手に「英語指南」の看板をあげていたと云う。（同氏談）こういう連中に揉まれて、松本中学以来のエリート意識は微塵に碎かれたことであろう。というのは、どう考えても当時の空穂はじゅうぶんに鍛えられていたとは思えない。勿論研けば光る資性は持っていたるが、地主階級に属した両親の晩年に儲けた男の子で、掌中の玉として育てられたから、徒らに気位ばかり高く、ひ弱な点があったと思う。深沢は後ちに早稲田の高等学院に英語の教授として勤めたが、退職の際の昔話に、当時の空穂にふれて、長身白皙の美青年だったが、或る日突

然、「俺は文学をやめて、大阪行つて商売の勉強をする。本でも机でも、欲しいものは何でも持つて行つてくれ」。聞いて仲間が驚いたと云うのである。育ちのよさを思わせる潔さと、如何にも思い詰めた青年の風貌が目に見えて来るが、いくら日清役後で、経済の急上昇した時代でも、住み込み店員の身過ぎは楽ではなからう。結局これも一年足らずで帰郷することになる。しかしこの文学放棄の生活が、どこまで徹底したものであったかは疑わしい。空穂の隨筆を読むと、はじめの早稲田時代に入手した『万葉集略解』を郷里にも持ち帰つて、鬱積した心の憂さ晴しに愛読しているが、あるいはこの『万葉集略解』などは、大阪の宿までお伴をしたものであったかも知れない。おそらく無断上京してまで入学したものを、学業半ばに放棄して、おめおめとは帰れない、というところから大阪行であつたろうが、かつて父の庄治郎が無断家出して江戸に行き、住み込み奉公をして、家運の挽回をはかった話が思われたに違いない。

失意で帰郷した空穂を、父は家族は郷土は温く迎えた。併しながらそれからの四年間の運命は、徹底的に空穂を鍛えあげたのである。すなわち、間もなく母は共に住むことを棄しとしたこの愛末子の看護をうけて死んだ。最大の同情者だった父は還暦を越して妻に先立たれ、ようよう衰えが見えて来た。空穂は我が身の前途を案じる父の心を汲んで、近村へ養子縁組をしたが、その父も死に、養家先にも安住は出来なかった。勤勉な農夫になりきつた兄夫婦の厄介になりながら、農業に慣れぬ空穂は、村の小学校の代用教員でもするより外に生活の道がなかった。おそらく心の

晴れぬ毎日だったろうが、空穂は穴熊のように、じつとそれに堪え抜いた。そんな時に、太田水穂との出会いがあり、空穂は従来心を引かれていた新体詩のほかに、歌とほんきで取り組むようになった。鬱屈した心をぶっつけて一途にうち込む。そこに時のまの恵めを感じたことだろう。水穂が「歌を詠むには、気の落ちついた、静かな、泣きたいような気のする時に詠む」といったのに対して、空穂が「僕は気の立つた時に、喧嘩腰になつて詠んだ方が詠みいい」（全集第五巻、作歌を初めた当時の思ひ出）といっているのは、生活の安定と不安定との差を感じさせるが、しかし空穂のこの言葉からは、環境にうちひしがれず、むしろこれに抵抗し、対決する姿勢が汲みとれる。逆境に強い空穂の性格は決して一日にして成つたものではないようだ。運命の転機はその詠草が与謝野鉄幹に認められたことから訪れた。鉄幹は書を寄せて、「新詩社」への入社を奨めた。空穂の自信は徐々に回復した。そして再度の遊学を決意したのである。幸い兄は農夫の生活に徹していたが、根は学問好きで、空穂に理解をもつて後援を約した。初度の遊学は、どちらかと云えば、やや無鉄砲な、浪漫的な憧れからだったが、五年の人生経験はじゅうぶんに空穂を成長させた。再度の遊学は地に足のついた地味なものである。当時の心境を空穂はこう述べている。「中等教員の検定試験をとねらつて一意勉強は続けて居たが、様子の知れるに随つて、国語漢文といふ科目は、その範囲の広いところから、そして又、新しい研究法をもつて研究しなければ駄目らしい所から、とても独習ぐらゐではおつつかないものだといふ事が分つて来た。折柄早稲田の専門学

校文学部も近頃は中等教員の免状を出すことになったと聞いたので、私は今一度早稲田の学生にならう、それが一番たやすい路らしいからと思ひ立つた」(同上)と云っている。こうして、空穂は明治三十七年に専門学校の「国語漢文及英文学科」を卒業した。

関根正直から源氏物語の講義を聞き、畠山健から古今集を習ったこともある。併し何と云っても、空穂に深い影響を与えたのは坪内逍遙で、講義はテーヌの英文学史であった。逍遙の講義は当時の学生にとって、どんなに魅力であったことか。岡一男はある研究発表会の席上で、五十嵐力の『新国文学史』の源氏物語に関する部分に「たしかにこれは画期的な業績だと思うが」そこにテーヌの影響のあることを指摘した。同席した五十嵐力が愛弟子のこの発表に深く首肯した姿が今でも目に浮ぶ。私は『窪田空穂全集』の「月報19」で、山崎敏夫が『新古今和歌集評釈雑感』と題し、好意をもって細かく批評してある文章を読んだ。その末尾に「ただ最後に一言しておきたいことは、窪田氏の新古今の評釈には『新古今歌風』の把握は十分に行なわれているが、俊成・定家・家隆(西行は別として)」といった各歌人の個性の捉え方が不足しているという見解がある。これもたしかに傾聴すべき見解であるが……」とあった。たしかにそうした見解もあろうかと思うと同時に、それがテーヌの在世中、テーヌ自身の研究に加えられた非難と同じ性質のものであることを、感慨深く受けとったのである。そうして改めて逍遙の感化力の偉大さ思ったが、この二書はいずれもそれが発表された当時は、きわめて新鮮で、囚われた国文学の世界から、古典を文芸の世界へ開放したものととして、人々を眩目させたものである。

空穂の再度の遊学の目的の一つは、中等教員の資格を得ることだったが、就職口は無かった。空穂は卒業の前年から小新聞の短歌欄の選歌を担当していた。これは当時の大学生(実は専門学校生)に対する世間の評価と歌の地位とを物語るもので、勿論歌が米塩の資となるまでには至らないでも、文筆処世には多少の自信がないでもなかった。周囲には文芸を愛する何人かの若者がいた。たとえば『山彦』に集ったような連中である。詩を書き、小説を書き、苦しいながらも東京に踏みとどまろうとしていた。空穂も亦、新聞記者となり、雑誌の編輯者となり、転々とした不安定な生活環境の中で、どうしても切ることが出来ない初恋の人に対する思慕のように、創作活動に取り着いていたのである。

空穂の創作活動を甚だ図式的ではあるが、いちおう新体詩から歌へ、歌から小説へ、小説から再び歌へ、と規定すると、見たように、国文学への関心ははじめからの底流ではあったが、小説活動が頂上にさしかかる頃から次第に表面に出て、小説への意欲が減退するのと、丁度クロスするような恰好で盛り上り、再び歌の活動がはじまるとそれと並立するようになる。このことは空穂の性格からいって、明治四十五年から大正五年末までの、女子美術学校の国語及英語教師としての生活と関係があるように思われるが、早稲田大学で講義をはじめた大正九年以後、国文学の研究は本格化するのである。その底流を最初に汲み上げたものは前田晁である。また教師を本業とする意志のなかった空穂をすすめて、早稲田大学入りの御膳立てをしたのも前田晁であると云う。前田

異が無かったならば、空穂と国文学との関係は、こうまで密接になつたかどうかは分らない。運命のめぐり会ひとは不思議なものである。前田は空穂と同期に、専門学校の「哲学及英文学科」を出た。空穂の信州と前田の甲州、共に山国育ちの劇しい気性の持ち主だが、不思議と気が合つて生涯の耐久朋となつた。当時、前田は田山花袋の下で「文章世界」の編輯を任されていたし、空穂もその雑誌の創刊号以来（明治三十九年三月）短歌欄の選歌を担当していた。編輯者の前田は雑誌の性質を考え、教養として、古典文学の知識を青年に与える必要を感じて、親友の空穂に、その方面での執筆を依頼した。空穂の国文学に関する初期の論考が、

ほとんど「文章世界」の誌上に発表されているのはこのためである。すなわち、明治四十二年の一月号・二月号には「香川景樹の歌」（分載）、三月号・四月号には「橘曙覧の歌」（分載）、五月号には「万葉集小論」、六月号には「金槐集の印象」（以上全集第九巻、十巻）とほとんど毎号、連続の執筆である。併しながら当時の空穂は、すでに新進の小説家としての地位を確保して、国文学に関する論考は、むしろ受身の、サイドワークである。前田自身も纔かながら小説も書き、その編輯方針は、「文章世界」を新進作家の拠点するところに重点を置いていた。したがって、「橘曙覧の歌」が掲載されたと同じ号には、空穂の小説「末子」と「母子」（全集第四巻）が載っているのである。この「末子」について、前田は後年、これは空穂の作家としての地位を不動のものとした傑作であるといっているが（窪田空穂文学選集解説）、はじめ古典の論考はそうした小説の随伴者だった。ところが作家的感覚で古典

に接しうち、接した古典に作家的感興を誘発され、その感興が更らにまた新しい古典の探究に向わせるという、連鎖反応的な繰り返しを通じて、積極的な古典摂取が始まって、或る時期の空穂は、日本の古典の主なもの、全部読みきつてやろうと決心したと云う。こうして、創作の興味が摂取の興味に置き換えられた時に、やがて空穂と小説との別れが予想されるのだが、この結果はミイラ取りがミイラになったと云うより、八本然への立ち帰りVと解すべきものであろう。何となれば、この本然への立ち帰りは、庄治郎、空穂を通じて、すでに傾向化した現象になっているからである。

それにしても空穂の視野は広い。景樹、曙覧については、あとの『和文和歌集』（昭和二年）で一括して取りあげるとして、こうした作家的姿勢が、じかに最もまな形で反映している労作が、のべた『評釈伊勢物語』である。物語第一段の「評」の書き出し、「女子を前にしては、男子は其の感情を恣（し）にして行く。然やし得る限り、享け得る限りは其の感情を尽して行く。其所に生活の価値なるものが潜んで居る。伊勢物語の作者はさう信じて居る。」という文章を読んだだけでも、八其処に作家居るVといった感じを否定出来まい。この原稿は空穂が、我が最終の歌集にしようと考えた『空穂歌集』の原稿と、同じ時に同じ出版社に渡されたものだといふ。まさに散文活動に脂の乗った時期の、作家の目をもつてみた作品である。ところで、この評釈には先駆的な論文があった。それもまた「文章世界」の誌上に発表されたものである。すなわち明治四十二年十一月の、古典を扱った臨時増刊号

に載った「小話集としての伊勢物語」（全集第九巻）がそれで、空穂は従来、歌中心の、むしろ文章は詞書の延長にすぎないと見られていた伊勢物語を、優れた短篇小説として高く評価した。その位置づけは、これを時代の座に置いてみれば、先人未発の優れた見識で、その各論的実証がこの「評釈」であったのである。

早く、明治四十一年に出版された『新派和歌評釈』（全集第十二巻）のうちの五十余首に及ぶ万葉集歌の評釈は、空穂の古典評釈の最初のものである。『その「序」の中で、まことに昂然と「短歌に作法といふものがある筈がない。ありとすればさういふ物を打破るのが却って本当の短歌を起す所以である。そう云い切った空穂は、おそらく訓詁註釈に終始した従来の古典研究に対しても、同様の気組みでぶつかっていったに違いない。空穂のねらいは文学的価値批評による古典の再吟味で、対象を一般の読書人、知識人に置いていた。これは確かに、固く専門の殻に閉じ籠った、誇り高い国文学者の盲点をついたものである。市井の評判も上々だった。けれども空穂はこれに驕ることは無かった。百姓育ちの空穂は、都市の華やかな文化人の活動を支えたものは、父の庄治郎によって代表される農民の、縁の下力持ちの勤労であることを知っている。地味な目立たない、しかも正確な語学的知識を必要とする訓詁の作業がなければ、文学的価値批評も危い。けれども訓詁には素養が必要で、いまは手の届かぬ所にある。この『評釈伊勢物語』では、すっかり先人の説（藤井高尚の伊勢物語新釈らしいが）に寄りかかって現代語訳だけはつけているが、後年の空穂の評釈書にみるような「語釈」はつけてない。

これは謙虚に自分の分限を認めているからである。ところが、前述の昭和七年刊の『新古今和歌集評釈』の「序」では、「註釈は最初のものであつて、同時に最後のものである。……註者はこの註釈の、全く無用のものとなる日の近からん事を衷心から希つてゐる……」といっている。これは語学的立場からの研究と文学的立場からの研究とが照射しあつて、互いにその誤差を正しながら段階的に高められてゆく、今日のは明日のより古く、明日のは明後日のより古い、註釈の宿命にふれたもので、作家から研究者への変貌がみられる。あえて研究者といつたのは、空穂は最後まで「学者」であることを自認しなかつたからである。

昭和十三年頃のことと思う。当時早稲田大学の文学部長であつた吉江喬松は、人に命じて、それまでに空穂の書いた国文学関係の主な論文を蒐集させ、少くとも三、四十篇はあろうか、それに参考書類として、『古今和歌集評釈』『新古今和歌集評釈』を添えて、学位を請求するよう求めたのであるが、空穂はこの親友の申し出を固辞し、再度のすすめには、「ここにゐるからこそ先生だが、他所に行つてまで勤めようとは思っていない。文句が付くなら後継者を探して引き継いでもらうよ。」といったと云う。（わが文学体験）吉江は嘆息して、その話は打ち切りになったが、ここに空穂の真面目があつた。その歌も空穂の生活である。その大学の講義も空穂の生活である。その研究論文も空穂の生活である。窪田空穂は窪田空穂であつて、それ以外の何者でもない。そういう真の自由人の立場に腰を据えて聊かもたじろがない。これこそテヌのいう、民族と環境と時代とが造りあげは空穂の人間像で

あったのである。

空穂は学問を講じるものの立場として、『評釈伊勢物語』以後も、『窪田空穂全集』の『古典文学論』(1)にみるように、伊勢物語に関する何篇かの論考を発表したが、四十数年後の昭和三十年、改めて『伊勢物語評釈』を世に送った。前著との相違を云うと、駄裁の上では、前著に無かった、学界の最高水準の「語釈」がついていること、内容上では「評」が概して短かくなっていることである。「評」の長短は、空穂と対象との相関々係を示すもので、前著では伊勢物語が小さく、空穂が大きい。後者では伊勢物語が大きく、空穂が小さい。後者は伊勢物語を歴史的存在とみて、その置かれた座で過不足なく捉えようとする研究者の立場のあらわれである。空穂には、斎藤清衛との古典研究の態度についての公開の書簡がある。(全集第八巻、昭和十四年)その中で、「文芸作品から受け入れた感を、その物を明らかにする心をもつて言はふとすると、何としても適当な言葉とはならない。達つて言はふとすれば言へもするが、結果から見ると、時には言ひ過ぎとなり、却つてその物を歪曲することになつて、むしろ言ひ足りない方が勝つたことになるといふ経験は私に度々持たされております」といっている。八饒舌は真実から遠ざかる、そんな考えが「評」を短かくしたものであらう。短くなったのは「評ばかりではない。もっと圧縮されたかたちの、それだけに抜き差しならない「現代語訳」の場合は一層であらう。このことは『古今和歌集評釈』改訂版(昭和三五)、『新古今和歌集評釈』改訂版(昭和三九―四〇)の「評」を、「釈」を、前著のそれと比較すれば直ちに领会され

る。空穂の『現代語訳源氏物語』が出来るだけ説明的に云い添えを避けて、原文に即した簡潔な訳で押し通しているのも、源氏を歪曲して伝えることを恐れるこの心からのものであらう。

『奈良朝及平安朝文学講話』は、早稲田文学社からの注文で、二人の幼児が病む家庭的には最悪の状態の下で僅か一週間で書きあげたものだが(我が文学体験)、これが坪内逍遙の目にとまって、新設の国文科講師に推薦されたのである。内容は奈良朝では万葉集を、平安朝では枕草子を扱っているが、これを仕事の上から云うと、半年前に出版の『万葉集選』、一年後に出版の『枕草紙評釈』(以上全集第二五巻)と重なり、見様によつてはその総論的取りまとめで、じゅうぶんの蓄積と用意とのあるものである。時期の上から云うと女子美術学校の講師を務め、一方、雑誌『国民文学』を主宰し、その創刊号(大正三年六月)誌上に「清少納言論」次号に「苦んだ人西行」(以上全集第九巻)を書き、更に翌年の四月号からは長編「養子」(全集第五巻)を連載した。こういう一連の作品と相前後した時期なのである。「養子」は空穂の小説歴では最後の光芒で、以後小説とは遠ざかり『国民文学』に発表するものも、ほとんど国文学に関する論考に限られたが、逆に短歌はこの雑誌を契機に再び詠みはじめられ、大正四年五月には「濁れる川」が刊行される。その自序で、空穂はこの頃になってようやく、自身の身辺を明るく落ちついた心で眺められるようになった、と云っているが、心境から云うとそうした安定した時期に差し掛つていたのである。

ところで、『万葉集選』は選んだ歌の意味と歌境とを簡単に解説

したもので、空穂の回顧談によると当時、参考としたのは「略解」だけで、「古義」は高価で手が出なかったと云う（全集月報21）勿論、啓蒙を目的としたものであったが、選歌の土台には、長年味わいつづけて来た万葉集の興趣を一般に分かとうとする願いと、人間探究と云う文学精神とが、しっかり据えられていたのである。空穂はそれをこういう言葉で述べている。「選をするに就ては、もとより私の好むところによるより外はなかつたのであるが、しかし捉へられてゐる境よりも、それを捉へた作家の心境と、その捉へた境とが如何に融合してゐるかといふ点を主とした。即ち作者の真実が如何に表現されてゐるかといふ点を主とした。」（同書序、大正四年一月）と。「作者の真実」には、空穂と同じく植村正久の影響下にあつた独歩の所謂「シンセリテイ」などと同時代的な文学精神を感じさせるが、要するに空穂にとつては、作家あつての作品で、作家の精神が、その作品の上に如何に燃焼しているかが問題なのである。おそらく、戦後に平安朝文学に関する従来の研究、評論を集成して刊行した際、題して『平安朝文芸の精神』（昭和二十一年十二月）とした命名は、この延長線上のもので、いみじくも空穂の研究の方向を示したものであつた。そうした傾向が、枕草子を通じて、清少納言の人間探究に向わせたのである。『枕草紙評釈』は「九十九段」までで中絶しているが、いったように『万葉集選』と同様、その総論的とりまめは、『奈良朝及平安朝文学講話』の中に生かされており、清少納言の人間探究は更に「随筆家としての清少納言」（全集第九卷、昭和三年）へ発展して、作者と作品との必然関係を見事に指摘す

るのである。こうした点の眼力は空穂の独壇場であるといつていい。

以上で前期の見渡しを終つたが、すでに与えられた紙数に近づいたので、大至急で後期を素描する。後期前半での代表的な労作は、「日本名著全集」（江戸文芸）中の『和文和歌集』上下（昭和二・三）二巻で、これには詳細な「近世和歌解説」（上）（全集第十巻）と要領のいい「近世歌人略伝」（上）（同上）が添えてある。

この全集は「解説」に非常に力を入れていたので、名は「解説」であつたが、通り一遍なものではなく、多くは独自の優れた論考であつた。江戸文芸編には早稲田の教授陣からも、空穂のほかに山口剛、黒木勘蔵が参加したが、いずれもその「解説」は鋭い感覚と深い学識とによつて、学界の注目を受けたものである。空穂の『和文和歌集』の「解説」は、近世和歌の革新の代表の座に加茂真淵と香川景樹とを据え、（上）では真淵及び田安宗武、橘千蔭、村田春海、楫取魚彦、海量、上田秋成、橘曙覧を、（下）では景樹及び小沢蘆庵、熊谷直好、木下幸文、大隈言道をとりあげ、その師承関係を追いつつ、具体的な作品例に即して、銘々の歌風と史的展開とを述べた、云うならば、表現上からみた近世和歌史で、昭和六年の『日本長歌史』（全集第九卷）と共に、和歌史特論とも称すべき空穂独自の考察であつた。

空穂は早稲田を停年退職した後、その蔵書の一部を、大学国文学科の研究室へ寄贈した。そこで八歌書文庫V設置の計画が進められたが、戦中のこととて未整理のまま、すべて灰燼に帰した。

何とも遺憾至極のことであつたが、その殆どは江戸期歌書の版本だつたという。このことから察しられるように、或る時期の空穂は、江戸期の歌書を片端から読み漁つたらしい。和歌に関する論考も、時代別にするならば、分量の上では江戸期のものが一番多いのではないか。古く「文章世界」「国民文学」等に発表されたものも、すべて全集第十巻に集録されて、その全貌を知ることが出来る。いま一触れる余裕はないが、そうした個々の論考の累積が、ここに開花結実したことは確かである。ただ、最も早く手を染めたものは、香川景樹に関するものであつたこと、またその量も多かったこと、この点について一言する。空穂の父庄治郎は云つたように、景樹門の内山真弓から漢籍を習つた。幼い空穂にはよく分らぬものだったが、家には、大版の薄様に綺麗な字で書いた『古今和歌集正義総説』が蔵されてゐた。それは父庄治郎が真弓から授かつたものだと言ふ。(全集第八巻、歌人内山真弓)。そうした思い出は香川景樹の名を親しいものにさせたであらう。けれども景樹―八田知紀―高崎正風とその師承関係を辿れば大歌所歌風の源泉は桂園香川景樹に発したもので、新派和歌者流からみれば、景樹は歌の上では愚物に過ぎない。空穂も新派和歌の立場に立つもので、決してその歌風に同感する筈はないが、創作と研究とはっきり區別して、好悪の感を研究に持ち込むようなことはしなかつた。この点は生きた人間に対する場合も同様で、駄質的に感じる好悪の念は、空穂が松本平出^{だく}身の文芸の士であるかぎり、どうにも薄いとは考えられぬところだが、ひとたび公的の座で作家なり作品なりを品隨する場合には、つとめて

感情を押えて客観に徹し、むしろその長所を拾つて、其処に焦点を合せて論じるのが常で、これが空穂の身上^{しんじやう}であつた。『和文和歌集』の前後にも幾つかの著書、論文があり、早稲田大学文学部の研究発表の機関誌『文学思想研究』には「雄略天皇御製歌について」(第一集、大正一四)、「源氏物語の作家的態度と手法」(第二集、大正一四)、「柿本人麻呂の長歌について」(第六集、昭和二)が載つてゐる。この数は他の教員に比して決して少ないものではない。三篇いずれも力作で、表現の吟味から作の内面に切りこんでゆく空穂独特の優れた論考であるが、この機関誌が学生にも配布される性質のものからすると、おそらく空穂は、学生に研究の刺激を与えることを教員の義務として、その一助のために、力めて執筆したものと察しられる。この律気さは父庄治郎譲り、百姓育ちを自認した空穂の持味^{もぢみ}であつたのである。

さて、昭和七年に『新古今和歌集評釈』の上巻が刊行されて、私の所謂、後期後半に入るのだが、この期の代表的労作は、何といつても、前述した、新古今、古今、万葉の評釈三部作で、ほかに『現代語訳源氏物語』の訳業に関連しての、幾多の源氏物語論考、戦後のものとしては、『日本古典全書』の中の『和泉式部集・小野小町集』、あるいは文芸評論としての『芭蕉の俳句』等が挙げられよう。このうち新古今の評釈は、はじめ選釈、のちに改版して全釈となり、古今集の評釈もものに改版が行なわれ、そのたびにいずれも大幅な補・省筆、改訂が加えられたのである。のみならず、最後の『万葉集評釈』すら、全集所収の際は、著者の書き入れ本を底本とせざるを得なかつたというほど、空穂の研究に

対する努力は最後の最後まで休むことを知らなかった。

和歌評釈三部作について簡単にいうと、まず、新古今、古今、万葉に関連しての空穂の論文は数の少ないものでなく、すべて全集第九巻と第十巻とに収められているが、中で、『新古今和歌集評釈』と時期的に重なり、それと密接な関係を持つものは「藤原俊成の歌論」（昭和七）である。空穂は新古今集に共通する詩情を「艶」と「あはれ」とみて、その共通する詩情が、個々の作歌の上に如何に具現しているか、それを見極めようとするのを、本評釈の基本的態度としたが、前記の論文は、副題を「主として艶と幽玄と本歌取とにつきて」といっているように、新古今集に共通する詩情と表現方法とを、その歌風を養い育てた俊成に溯って捉えたもので、云うならば「評釈」とは各論、総論の關係にあって切り離せぬものである、空穂は「新古今集評釈について」という随筆で、新古今の歌風を現代からは縁の遠いものだとしながらも、その歌人達の力量を高く評価して「せめては彼等の枯骨に水を澆ぐだけのことはしたい。私はさう思つて評釈のペンをとりあげた。」（全集第八巻）といっているが、新古今は空穂によつてはじめて今日のものとなつたと云つてよい。なお新古今歌人の中では西行への関心は特に深く、古く論文のあつたのはみたとおりで、昭和十三年には、山家集歌の選釈を中心とした『西行法師』（全集第二六巻）が刊行されているのを附記しておく。つぎの『古今和歌集評釈』は新古今評釈の経験がじゅうぶん参考となつて生かされている。『万葉集評釈』は更らにその後につづくものだが、それは書かれた時期から云うと、戦火に追われて、参看すべき書

籍にも乏しく、ただ氣力だけで書きあげたもので、そういう意味では、この三部作の中では『古今和歌集評釈』が最も脂の乗りきつた時期のものと云えよう。新古今の「恋」や「雑」の歌は極めて難解である。それだけに、ひと通りの解がつくと、それで分つたような氣になるのだが、古今の歌は読めば直ちに分つたような氣になるだけ、作の内面に踏み込むことが難しい。その難しい道に確かな案内者となり得ているのは、空穂の鋭い勘で、その作家的體驗が評釈の上で最も有効に働いたのは、おそらく古今集の場合と思う。これに添えられた「古今集概説」は、空穂の諸論文中でも頗る出色のもので、和歌を、その持論である実用から文芸へという流れの上に浮べて、平安貴族の享楽、耽美を求める心と、生活指導原理となつた仏教の教理とが、それぞれの比重をもって表現されると、人事と自然との一体化、事象を流転の相の上で大観する傾向、理智的な発想と構成、低音で柔軟で曲線的な調、といった歌風となつてゐるのを、実例をもつて克明に示した細心で、しかも和歌文化史とも云うべき大きなスケールをもつた論文であつた。『万葉集評釈』のねらいは価値批評で、それは『評釈伊勢物語』以来、一貫した空穂の評釈の態度である。万葉の評釈がいちおうの脱稿をみたのは昭和二十一年で、評釈伊勢物語から実に三十六年の歳月が流れている。境遇の変化は、作家空穂を学究空穂たらしめた。学識は深くなり、読みは正確となつたが「価値批評」ということは、事としては相応な労を要することであるが、臨るところは単にその一人の感想に終つて、他と相渉るところの少く見える」もので、したがって、そうした批評が「空疎なも

の「見えがちな」ことを万々承知の上で、しかしながら「貴重な古典を、単に架上のものにとどめず、これを胸中のものとしようとするには、この価値批評を通さなければならぬ」（以上、万葉集評釈・序）として、敢て困難な道に立ち向うのである。空穂は若い時から、歌集の中では、万葉集を一番愛読して『新派和歌評釈』（明治四二）所収の万葉集歌評釈以後、みて来たように幾多の論文、評釈を書いたが、すべてこの一筋に繋がったもので、中でも作家あつての作品だとする空穂の場合は、数の上からも人麻呂・憶良・家持等の作家論が多く、質の上からもそれが独自の光彩を放つものとなっている。△源氏物語と空穂△については、何としても触れねばならぬところだが、私の無計画はすでに与えられた紙数を大幅に超過したので、ただ、源氏物語に関する諸論文は、『窪田空穂文学選集』（春秋社刊）の「わが古典鑑賞」(一)にそのほとんどが集められていて、そこには我が恩師で、空穂を最もよく知っている岩本堅一のきめの細かい解説がついている点を紹介するにとどめる。最後に、空穂の古典研究に対する総括として、つぎのことを云い添えて終りとしよう。

丁度、私の所謂後期後半のはじめ、空穂は国文学専攻科の主任教授となり、学生の要望を受けて、「早稲田大学国文学会」を結成し、その会長に就任して、極めて広い範囲で研究者を養成したが、その学会発行の「ニュース」に、空穂は「国文学より日本文学へ」と題する一文を載せている(全集第八巻)。これは空穂がその抱負と学生指導の方針とを示したもので、要領は『国文学研究

も今日では外国の文学研究者と同様、比較文学的な方法によらねばならぬ時期に差しかかっている。併し事は容易でない。一例をあげて云えば、国文学の上で当然あつて然るべき文芸評論史の一篇すら書かれていない。そうして、これには勿論、シナのその方面の研究や、ヨーロッパに於けるその方面の知識を弄(もよほ)にすることは許されないのだが、現実には他国との比較はおろか、同じ国文学の中でさえ、文芸評論の根幹である歌論と俳論とは個々別々の分野で研究されていて、一つのものとはなっていない有様である。またその文芸評論史といつても、日本文学史の一部に過ぎないのだ。こう思つて来ると、われわれ国文学の研究に志しているものは、今はまさに慌てなくてはならない時である。△と云つた趣意のものである。これを書かれた昭和七年という時点においてみれば、時流を躍(を)んだ見識をうかがうに足りるものだが、明日の文学を生み出すためには、何よりも確かな文芸評論が必要だとする空穂の信念は揺がぬもので、晩年八十七歳の老齢に『芭蕉の俳句』を著し、「筆者は俳句の実作に経験をもたないものである、したがつて無知な、勘の鈍い者である。たぶん、大方の嗤笑をうける程度の書となろうと危みつつ――正直に、素朴に筆を進めたものである。」(あとがき)と云っているのは、この「ニュース」の一文と結んでみる時、決してそれが我れ面白といった軽いものとしてではなく、私には文芸評論を志向した空穂の、体あたりの鋭い気魄がひしひしと感ぜられて来るのである。